不思議の森から

Volume 29

THE YOKOGURAYAMA NATURAL FOREST MUSEUM NEWS, Ochi　November 2013

■横倉山自然の森博物館ニュース

片岡橋（上流側より）

伝・片岡光綱の墓

仁淀川の数少ない沈下橋
—片岡橋—

“沈下橋”といえば、高知県では四万十川のものが有名で数も多い（約50橋）が、清流・仁淀川にもいくつか残っている。本流に６橋、支流に小規模なものが20数橋あり、このうち越知町内のものが最も多く、４橋（本流：３、支流：１）が見られる。その中で、仁淀川本流の最も下流にあるのが「片岡橋」（全長149.1㍍、幅員4.5㍍）である。今から半世紀ほど前の昭和44年建設で、それまで渡し船で渡っていたのを、洪水の時でも子どもたちが通学できるようにとの親の願いから完成した。地元住民にとっては大変思い出深い橋である。

そもそも“沈下橋”とは、豪雨による増水時に敢えて水面下に没するように造られたコンクリート製の橋で、地方によっては“潜水橋”（徳島県・吉野川など）、“沈み橋”（大分県）などとも呼ばれ、今日普通に見られる水面上の高い位置に架けられた「抜水橋」とは区別される。台風の襲来の多い高知県ならではの橋で、水の抵抗を少なくするために、また流木などが引っ掛からないように、欄干がなく橋脚は流線型となっていて、橋幅も狭く車のすれ違いはできない。建設費が安く、壊れても短期間に再建できるというメリットがある。地域住民にとって不可欠の生活道であり、それぞれに個性があって、大変趣きのある“芸術性”を有するものが多く、中には「久喜橋」（仁淀川町）のように高知県の「登録有形文化財」に指定されているものもあり、是非とも後世に残したい建造物の一つである。

「片岡橋」は、北詰（仁淀川左岸）の片岡集落と南の南片岡集落を結ぶ橋で、片岡集落の北上方には、中世にこの地域及び高吾北一帯を広く支配した豪族・片岡氏の居城であった「片岡城址」がある。備前焼、常滑焼、染付、青磁・白磁など相当数の焼物の破片が見つかっており、城主はかなりの有力者であったと思われる。ここには、「毬ケ奈路」と呼ばれる地名が残っていて、かつて戦国武将たちが、戦の合間に蹴鞠をして遊んだことが想像される。山麓の片岡集落の北端には、佐川・真言宗乗台寺末寺妙福寺があり、境内には長宗我部家家老で片岡家14代の片岡城主左衛門太夫・片岡光綱の墓（五輪塔）と、光綱公が手厚く保護した祈念寺・妙福寺一世の法印尭識横倉寺住職（天保２年没）の墓（卵塔）がある。光綱とその先代の茂光の時代が片岡氏の全盛時代といわれ、京都・龍安寺の初代住職である義天玄昭が若い頃修行した柴尾の天忠寺を再興してその隆盛を計っている。「片岡橋」は、このような歴史に満ちた場所に位置する、堂々とした趣きのある橋である。

杉原神社表参道石段　―御手洗―

安　井　　敏　夫

「御手洗」は二本杉の間の石段をくぐった突当りにある

横倉山中の杉原神社（横倉山修験道の中ノ宮）への旧表参道の途中に“御手洗（みたらし）”と呼ばれる泉があることが、土佐の代表的な江戸時代の歴史書である『南路志』（1805～1813）の中に出てくる。杉原神社への参拝客がここで手や口を清めた泉である。『南路志』の中の「詣金峯山紀行」によると、

「山守（楠神の織田家のこと）より三十丁（約3.3km）はかり也。紅葉の大木有。此泉鏡のことく、参詣のものこゝにて垢離（身を清めること）をする」

とある。

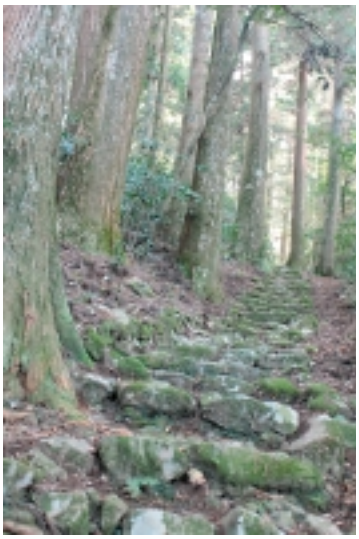
場所は、杉原神社の旧表参道の石段を第二駐車場の鳥居から375段登った、参道のほぼ中ほどにある「夫婦杉（めおとすぎ）」の43段（約20メートル）上方の石段の突き当りがそれに当ると思われる。ここは、約４億年前の日本屈指の古い地層・岩類が広く分布する横倉山の北斜面を東西方向に走る大断層帯に当り、すぐ北側には断層に沿って地下深部から上昇して来た蛇紋岩が露出している。断層であることと風化されやすく不透水層となる蛇紋岩から成ることから、小さな谷地形になっていて常時少量の水が湧き出している。今年の２月に確認・整備された、安徳天皇の行在所（あんざいしょ）傍にあって天皇の飲み水に利用されたとされる“供御水（くごすい）”もこれの西方延長に当る蛇紋岩地にある。「夫婦杉」と“御手洗”との間（南側）には、一転して４億年前の花崗岩が分布しており、参道石段の石に広く使用されている。

「御手洗」

“御手洗”は、参道石段の両側にまるで鳥居のように立つ二本の杉の巨木がまるで神社の山門のようにもとれる「夫婦杉」からほど近い。ここからちょうど、石段が直角に左に折れ、最もきつい勾配となる。石段の両側には、かつての参拝者が挿し木したものが在り付いたといわれる樹齢300年ほどの杉が立ち並び、さながら「熊野古道」（世界文化遺産・三重県）のミニチュア版を思わせるような参道の様相を呈している。ここまでは、ブナ科のアオガシを主体とする天然林で、横倉山の中では「アオガシ群落」で形成されていることになる。また、参道石段南側には、地球上で日本にしかないという日本固有の植物（樹木）で“生きた化石”でもある「カツラ（桂）」（カツラ科）の巨木も１本ある。昭和44（1969）年の古木・巨木調査の段階では10数本もあったようである。日本の渡り鳥の中で最も美しいとされ、高知県の県鳥である“幻の鳥”「ヤイロチョウ」の鳴き声はこの周辺でよく聞かれる。

「夫婦杉」（左）

この趣きのある“御手洗”を何とかして復元したいと数年前から思いつつ、今年の９月27日にやっと、博物館の職員と越知平家会のメンバーの二人で整備することにした。土砂を掘る作業を進めていると、池の中に突出するやや大きめの石の上に“一文銭”（寛永通宝）が一枚置いてあるのに


表参道石段（御手洗－杉原神社）

気付いた。恐らく参拝客がお賽銭として置いたか泉の中に投げ入れたものであろう（よく残っていたものである）。まさしくここが“御手洗”であることを物語る確かな証拠といえる。

土砂で埋もれた泉の底を掘り下げ、周辺を整備して当時の泉を復元した。かつて参拝客で賑わった200年以上も前の“御手洗”が今ここに蘇り、往時の様子を想像すると感慨深いものがある。

“一文銭”（寛永通宝）

現在は第二駐車場から一番上の第三駐車場に至る林道ができたため、ここを通る登山客は滅多にいないが、是非この歴史のある旧表参道も往時を偲びながら利用して欲しいものである。

（やすい としお／横倉山自然の森博物館 副館長兼学芸員）

土佐を代表する石材 ―“虎石”―

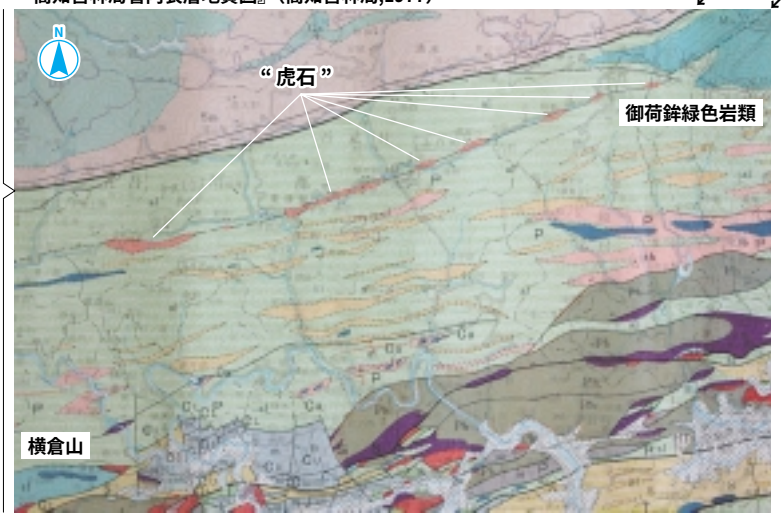
安井　敏夫

“虎石”

清流・仁淀川の河原の石としてよく見られ、高知県を代表する石とも言えるものの一つに、“虎石（とらいし）”と呼ばれるものがある。淡黄白色の石の表面に淡褐色の平行もしくは鱗状の縞模様のある石で、その模様があたかも虎の体表の縞模様に似ていることからその名がある。何だか、プロ野球の阪神タイガースファンが喜びそうな名前の石であるが、岩石学的な正式名称は「石英斑岩」（流紋岩と呼ぶこともある）という火成岩（半深成岩）である。火成岩といっても、第四紀の火山のように地上に噴出して火山を形成するようなものではなく、上八川（かみやかわ）－池川（いけがわ）構造線（“御荷鉾（みかぶ）構造線”の一部）と呼ばれる、三波川（さんばがわ）帯と秩父累帯との境界をなす断層（もしくはそれと調和的にその南側を東西方向に走る断層）に沿って地下からマグマが貫入してできたものである。尤も、“虎石”と呼ばれるものの中には、岩相変化があり石英斑岩以外に細粒の花コウ閃緑岩（深成岩）もあるようである。いずれにしても、二酸化ケイ素（SiO_2）に富む流紋岩質ため石英や斜長石の斑晶が点在し、有色鉱物として黒雲母が含まれており、縞模様の一つ一つはその中に含まれる鉄分が酸化したものといわれている。何故平行な縞模様になるかは、はっきりしないが、マグマが冷えて固まる時に生じた内部構造（黒雲母の定方向配列など）を反映しているものと思われ、実際少くともその一部には黒雲母の配列方向と調和的なものがある。

形成された年代は、約1200万年前（新生代新第三紀中新世）で、高知県の足摺地域に分布する花コウ岩（新第三紀花コウ岩類）のそれ（約1300万年前）と似かよっている。ちなみに、高知県内で花コウ岩が分布するのは、足摺地域と越知町横倉山で代表される「黒瀬川（くろせがわ）構造帯」に沿った断続的な帯状分布を示す二地域のみで、両者ともかつて石材として利用され、特に後者は４億年前の今は

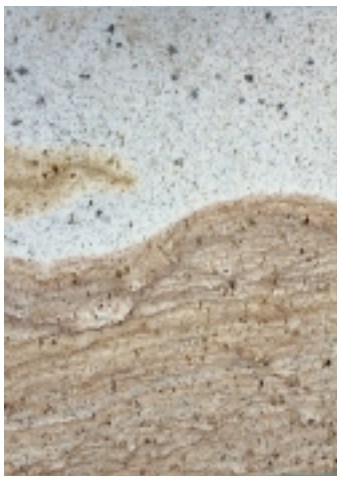
『高知営林局管内表層地質図』（高知営林局,1977）



なきゴンドワナ大陸の断片である。

この“虎石”、実は横倉山産の“土佐桜”（４億年前の日本最古の石灰岩）とともに、高知県を代表する石材の一つであった。県内における主な使用箇所は、県庁１階正面玄関のロビーの壁面、四国森林管理局（旧高知営林局）１階の壁と２階に通じる壁面などである。このうち、前者のものは、土佐郡土佐町の東石原産のものといわれている。“虎石”の分布幅は数～最大80㍍でと狭く、主な分布域は、東は土佐郡土佐町西石原から、西は旧吾川郡池川町柳野（現仁淀川町）まで20～25kmに及び、御荷鉾緑色岩類の分布の見られない地域の断層（上八川－池川構造線）に沿って細長く断続的に露出している。主な採石場は、かつては土佐郡土佐町西石原にあったようで、観察に適した露頭は旧吾北村思地（おもいじ）（現いの町）の思地橋下の河床などで見られる。上八川川は上八川－池川構造線に沿って流路が走っており、これに貫入した“虎石”がちょうどここに顔を出していることになる。なお、同構造線上に断続的に見られる“虎石”と酷似するものが幡多地方（宿毛市）の四万十帯※2にもあるらしく、「竜紋石（りゅうもんせき）」という石材名でかつて切り出されたことがあり、足摺海洋館ロビー正面壁や先述の高知追手前高校の改修後の外回りの塀の腰、笠石などに使用されている（改修前は“虎石”）。それと、現在は取り壊されてないが、かつて、朝倉地域の民家の塀全体に使用されていたケースもあった。ただし、こちらの方は石英斑岩ではなく、細粒完晶質の「アプライト（アプライト花コウ岩）」である。顕微鏡下では比較的浅所に貫入した花コウ岩であることを示す微文象（びぶんしょう）構造やミルメカイト（斜長石と虫食い状石英との連晶）が全体にわたって見られる。つまり、“虎石”（半深成岩）よりもより深所にマグマが貫入してできた岩石で、極めて石英（SiO_2）に富むものであることがわかる。このように、一口に“虎石”と言っても、いろんな岩質のものがあることがわかる。

“虎石”

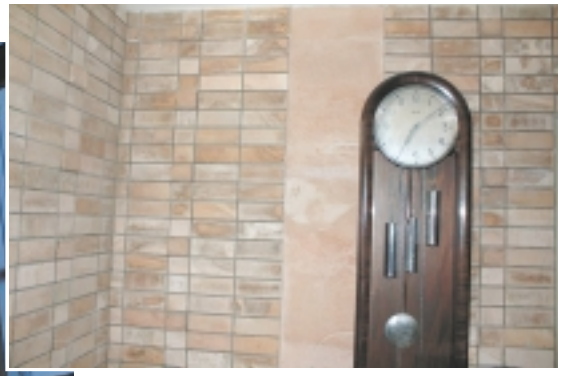

「竜紋石」

一方、日本列島で第一級の活断層として知られる中央構造線沿いにも、酸性火成岩類の貫入が見られる。愛媛県松山市の砥部（とべ）焼の陶石の安山岩（粗面岩質安山岩）もその一つである。また、「伊予

『高知県地質鉱産図』（高知県,1968）

高知追手前高校の外塀

県庁正面玄関１階ロビー壁面（東面）



四国森林管理局（旧高知営林局）１階壁面

アップ

の小京都」として知られる大洲市の肱川沿いの川岸にある臥龍山荘の石段や飛び石に使用されている、表面が褐色に酸化して木の幹を思わせる長方形の“玄太石”も、双美町上灘産のほぼ同年代の石英安山岩（デイサイト）のようである。さらには、産地は不明であるが、京都市内でも小庭の置石として使用されているのを見かけたことがある。

このように、“虎石”とほぼ同年代の1200～1400万年前に形成された岩石（火成岩類）は、四国の至る所に見られ、何らかの関連性・同時性があるものと思われる。例えば、プレートの沈み込みによって、地下深部に潜り込んだ地殻が溶融し、流紋岩～安山岩質マグマとなって、断層などの地層の弱線部に沿って貫入してきたことなどが考えられる。

※１『高知県地質鉱産図』（高知県,1968）では、本構造線が“御荷鉾構造線”の一部になっている。
※２宿毛層群平田層〔古第三紀漸新世〕の向斜軸及び本層と有田層〔白亜紀ヘトナイ世〕とを境する断層に貫入

（やすい としお／横倉山自然の森博物館 副館長兼学芸員）

横倉山ミニ歳時記

■メタセコイア　*Metasequoia giyptostroboides*

博物館の進入路の両側に、裸子植物の“生きた化石”のメタセコイア〔スギ科、和名：アケボノスギ（曙杉）〕の並木がある。春の新緑、秋の紅葉が美しく、特に、紅葉はレンガ色に真っ赤に燃えるような色付きで、さながら韓国のテレビドラマ『冬のソナタ』のシーンに出てくる観光スポットを思い出させる。

雄花

化石として見つかるためすでに絶滅したと考えられていたが、1943年に中国四川省で現生種が発見された。日本列島にもかつて（中生代白亜紀～第四紀更新世）は存在したが、現在は絶滅して化石でしかみることができない。現在日本全国の街路樹や公園樹として見られるものは、中国から苗木（挿し木）や種子を譲り受けて植えたものが大きくなったものである。雌雄同株で、雌花は花序、雄花は総状花序もしくは円錐花序で枝の一部から垂れ下がり、雌花が咲き終わると丸い球果が付き、熟すと果実が開いて種子が落ちる。

よく学校の校庭に、同じ“生きた化石”であるイチョウとともに植えられるが、イチョウに関しては、並木の場合防火林の役割を果たすことにもよると思われる。メタセコイアの場合は、生長が早く樹形が美しい上に、“生きた化石”ということで「生命力が強い」ため、メタセコイアのように子供たちに“すくすくとたくましく育って欲しい”という願いが込められているのだろうか？

博物館行事

企画展：『山野草に魅せられて
－横倉山で出会った花々の写真展』
2013年３月16日（土）～４月14日（日）

「山野草写真愛好家」会員の萩野善久・鈴子夫妻（土佐市）による、横倉山で見られる可憐な山野草の写真展。

夫妻が、10年ほど前に『横倉山タイプ植物』の一つで世界的な希少植物である「コオロギラン」と初めて出会い、それ以来横倉山にはあまり目立たないが魅力ある多くの花があることに気付き、特にマクロで見る足元の小さな花に今まで見えなかった魅力が隠されていることに感動を覚えたという。

今回の企画展では、そんな中から、夫妻がデジカメの普及とともに10年来撮り続けてきた、横倉山の牧野博士ゆかりの植物や一般にはあまり目立たない足元の可憐な植物など、その美しさと神秘性に感動したものの写真約100点と180種の花の写真を映像で紹介する。

「何気なく見過ごす小さな花々がこんなにも美しいとは…」「初めて見る山野草が沢山。しかも美しい。写真技術の高さ。私ももっと山野を歩きたくなりました。」「山野草のすばらしさにうっとりしました。ありがとうございました。」などの感想があった。

企画展：『キッズ サイエンスパーク』
2013年４月27日（土）～６月９日（日）

缶つり

遊びを通していろんな科学の不思議や原理を楽しみながら学ぶ“アミューズメントパーク”。

磁石のもつ目には見えない磁力を利用したいろんな遊びや実験を体験する『磁石の科学』、音が作り出す波形・模様を体験する『音の科学』、バネやテコの原理を体験する『動力の科学』『重力の科学』など。

「おもしろかった」「楽しかった」という感想が大多数で、「親子で楽しく遊べた」ようだった。

第35回写真家協会展：『土佐』選抜移動展
６月15日（土）～23日（日）

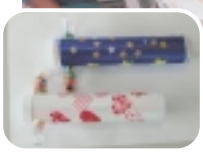
会員53名、一般公募39名による150点の作品のうち92点を選抜し展示する。

県内の伝統ある祭りやイベント、風俗、風土などを写真として記録に残すことが目的で、毎年芸術的な作品が出品され、人々の目を楽しませてくれる。

夏休み博物館教室〔工作〕
８月18日（日）午前・午後
〔講師：橋本　優 氏（日本リサイクル万華鏡協会）；参加者：午前 18名、午後 20名〕

ここ何年か定番の“オリジナル万華鏡”作りをメインに、余った時間でいろんな廃材を使ったグッズを作る。今年は、地元高知県産のスギをサイコロ状に切った９個のブロックをキュービックに組み立てる「ブロックパズ」を行う。

『万華鏡作り』は、ほとんどの参加者が「楽しかった」「きれいだった」という感想をもち、『ブロック作り』は楽しかったが少し「難しかった」ようである。



夏休み博物館教室〔化石〕
８月25日（日）
〔講師：安井敏夫（横倉山自然の森博物館学芸員）、参加者：９名〕

今年は朝から雨が降っていて、決行するか否か判断に迷ったが、参加者の希望を聞いた上で、予定通り決行することにした（結果的には、雨合羽もしくは傘を差しての採集となったが、植林の中で大して雨にも濡れることがなく決行して良かった）。

いつも露頭直下の転石を拾う（できるだけ私有地の山を崩さないよう露頭は叩かないようにしている）が、化石は例年に比べ少なくなってきた。もうここで教室を行うのも最後なのかもしれない。一昔に比べると、安全でかつそこそこ化石が採れ、楽しく化石採集できる場所がほとんどなくなってしまった…。

友の会だより

「聖神社とアケボノツツジ観察会」
2013年４月20日（土）〔参加者：14名（内事務局２名）〕

本年度最初の友の会活動で、昨年十分観察できなかった小日浦のアケボノツツジの群生の観察をメインとする。本地域のものは、県内では珍しく低地（1000m以下）で見られ、他に黄花のヒカゲツツジ・トサノミツバツツジ・オンツツジ・コメツツジなどもあり賑やかである。

聖神社は、その立地条件から“土佐の投入堂”とも呼ばれ、大変珍しい神社である。「聖神社保存会」や博物館友の会を中心に、眺望のいい対岸までの道作りを行い、途中から木橋を渡って神社の建つ岩場の上り口まで通じる道が整備され大変便利になった。

この日は、聖神社の観察を終え、昼食を済ませた頃から小雨が降り始めたが、アケボノツツジの観察にはそれほど支障はなかった。満開の見頃ではなかったが、ピンク色の上品な花が参加者の目を楽しませてくれた。

「仁淀川水質調べ」
2013年６月１日（土）〔参加者：９名（内事務局２名）〕

「身近な水環境全国一斉調査」の一環。

今年も、昨年と同じ①仁淀川本流、②坂折川（仁淀川支流）、③梅ノ木川（同）の３ケ所で測定する。COD（化学的酸素要求量）値は、①0、②0～1、③7～6で、仁淀川本流及び本流に近い支流（②）では「非常にきれい」で、市街地内を流れる支流（③）では「汚い」であった。

「ヒメボタル観察会」
2013年６月26日（水）
〔参加者：友の会会員11名、一般７名〕

今年はヒメボタルは少なかったが、その代わり、発光キノコであるシイノトモシビタケが例年になく数が多く、200本近く着生していて華やかで幻想的だった。

一方、地面の落ち葉に付着したキノコの菌糸が光る“地上の星”は、今年はまとまって観ることができなかった。木の幹に着生した“ギンガタケ”は、シイノトモシビタケよりはさらに小さいため、明かりはかすかである。それでも、東京都の八丈島とここ横倉山だけにしか観られないという極めて珍しい発光キノコの希少性・神秘性は魅力的である。

「“御手洗”の整備」
2013年９月27日（金）
〔参加者：友の会会員（博物館）１名、越知平家会１名〕

杉原神社表参道にかつてあった、参拝者が手や口を清める泉の復元・整備を行った（詳細は本文にあり）。

トピックス

■トサジョウロウホトトギス（鉢植え）

博物館で鉢植え（２鉢）で育てている、牧野富太郎博士の発見・命名による『横倉山タイプ植物』の一つ「トサジョウロウホトトギス」（ユリ科）の一つに、この10月９日に10輪の蕾が付き、９、10日と30℃を超す夏日が続いた所為か、11日には一気に開花した（20日にはすでにほとんどがしおれてしまった）。昨年はわずか１輪であったので、今年は見ごたえがあった。

博士が「横倉山で最も印象に残っている植物」（博士92歳の時の東京でのインタビュー）であるというだけあって、やはりレモン色の花がとても可憐でうっとりするような上品さの漂う花である。

■発光キノコ　－シイノトモシビタケ－

横倉山で現在確認されている発光キノコは４種あり、その一つである「シイノトモシビタケ」。今年は、これまでで最高の200本ほどの数の個体が発生し、横倉山自然の森博物館友の会・フォレスト　クラブの観察会を始めその他多くの見学者やカメラマンで賑わった。闇の深まりとともに浮び上る（姿を現す）神秘的な青白い輝きに、あちこちで感嘆の声が聞かれた。

本来６月の梅雨時期と９月に発生するが、６月の方が主で、９月のものは数が少なく、今年は１本だけだった。今年の夏は雨が極端に少なかったため、キノコの生育が悪かったのかもしれない。（写真は「ヒメボタル視察会」時）

写真：高橋宣之 氏

■横倉山自然の森博物館ニュース 第29号 平成25年11月1日発行

〔博物館日誌（抄）・平成25年度博物館行事予定〕

●３月16日（土）～４月14日（日）
　春季企画展：『山野草に魅せられて
　　横倉山で出会った花々の写真展』
●４月27日（土）～６月９日（日）
　企画展：『キッズサイエンスパーク
　　～楽しみながら科学を学ぶ』
●６月15日（土）～23日（日）
　第35回高知県写真家協会展：『土佐』選抜移動展
○７月20日（土）～11月17日（日）
　夏休み企画展：『昭和のレトロ展－Part２－』
●８月18日（日）　夏休み博物館教室〔工作〕
●８月25日（日）　夏休み博物館教室〔化石〕
○11月30日（土）～2014年１月13日（月・祝）
　企画展：『南海地震・写真展』
○2014年１月25日（土）～３月９日（日）
　企画展：『化石水族館』（仮称）

〔博物館友の会「フォレストクラブ」平成25年度活動予定〕

●４月20日（土）　“土佐の投入堂”聖神社と
　　アケボノツツジ観察会
●５月25日（土）　友の会総会
●６月１日（土）　仁淀川水質調べ
●６月22日（土）　杉原神社のヒメボタル観察会
○11月30日（土）・12月１日（日）〔一泊二日〕
　　修験道の聖地・奈良吉野山めぐり

スタッフの声、声、声

〔山中〕　今年は、台風や前線による雨の多い年で、越知中学校の屋内運動場の１階部分も仁淀川の洪水で浸水しました。越知小学校の運動会も延期になったり、明治と横畠地区の運動会も体育館での開催となりました。
コスモスまつりは、オープンの日と最終日が大雨で、中の３連休が晴天で多くの来客がありました。
また、この夏は、西土佐の気温が日本最高の41℃になったりと、異常な気象が続いていると思います。やはり原因は、地球の温暖化ではないかと思います。結局、温暖化防止に、世界を上げて取り組むべきと思います。

〔前田〕　広島県芸北地域との交流目的で八幡の夜神楽見物に行ってきました。参加者７名はもちろん初体験です。一晩中舞う奉納夜神楽を、楽しみと体力的な不安を抱えながら冒険のような気分で旅立ちました。到着後はカキツバタ、神楽団の関係者の皆様に歓迎していただき交流を深めました。舞台となる大歳神社の拝殿には地域内外から多くの見物客が集まり熱気に溢れていました。特に目立ったのは子供たちが多数見物していたことです。私たちは時には眠気で意識を失う中、飽きることもなく舞手とやり取りしながら大半が元気に夜を明かしました。彼らが伝統という熱い流れを絶やすことなく未来に引き継いで行くことでしょう。

〔安井〕　今年の夏の暑さは異常であった。四国地方の梅雨明けが７月８日と例年になく早かったのに加えて、雨が少なく猛暑続きで、高知県西部の四万十市江川崎では国内観測史上最高の41℃を記録した。９月に入って、台風に伴う未曾有の豪雨で京都・嵐山の観光地が冠水したり、竜巻の被害を受ける地域が出るなど“異常気象”ともいえる現象が相次いだ。それでも、お彼岸の時期になると曼珠沙華が咲き始め、植物は季節に“正直”（尤も桜の狂い咲きというのもあるが）だと感じさせられる。ツクツクボウシが10月に入ってもまだ懸命に鳴いていた。“季節の同居”とはこういうことをいうのだろうか…。10月９日に新潟県糸魚川市で35℃の観測史上初の真夏日を記録。異常気象としか言いようのない現象である。そんな猛暑の年であったが、今年は、２月に安徳天皇の行在所脇の天皇の飲み水として使用されたという「供御水」を、そして９月には、杉原神社表参道の途中にあったという、参拝者が手や口などの身を清めるための泉「御手洗」を越知平家会のメンバーと二人で整備することができた。長年の念願がやっと叶い、また横倉山に新たな名所ができ満足感がある。

〔片岡〕　長く続いた暑さも終わり、すっかり秋の風情です。秋と言えば「芸術の秋」「読書の秋」「スポーツの秋」など、いろいろ結びつけて語られますが、私にはもう一つピンときません。秋といえば「食欲の秋」厳しい冬を乗り切るための生命現象だとあきらめています。

〔伊藤〕　金刀比羅宮に行ってきました。平日で人が少なく、秋晴れでとても気持ちのいい1日でした。讃岐一刀彫のだるまをカラフルに色づけした山中象堂のPOP達磨の実物も見ることが出来ました。

〔岡〕　秋の越知町と言えば、思い付くのはコスモス祭りですね。私は今年初めてコスモス祭りに行ってきました。というよりお昼ごはんを買いに行ったのですが。思った以上にメニューもあり、優柔不断な私は30分近く悩みました。コスモスも大雨にも負けず綺麗に咲いていました。今年の開催期間中、雨が多くて非常に残念でした。

《お詫びと訂正》

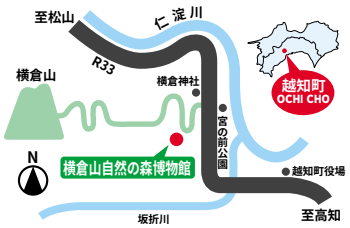
『不思議の森から』（Vol.28）に誤字がありましたので、ここにお詫びして訂正致します。

・p１　左列19行
　御年34歳　→　御年23歳
・p２　左列21行、33行
　梅　→　桜
・p３　右列11行
　下加茂神社　→　下鴨神社

高知県越知町立
横倉山自然の森博物館
THE YOKOGURAYAMA NATURAL FOREST MUSEUM, Ochi
〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060　FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.kochi.jp/

●開館時間：午前9時より午後5時まで
　最終入館は午後4時30分
●休 館 日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
　12月29日から翌年の1月3日まで
●入 館 料：大人……500円
　高校・大学生……400円
　小・中学生……200円
（※各20名以上の団体は100円引き。）

●越知への交通
高知 ―JR特急 約30分／JR普通 約50分― 佐川 ―バス 約15分― 越知



地球環境にやさしい
再生紙と大豆油インキを使用しています。